

嫉妬・羨望と社会的比較の過程
—嫉妬と羨望の心理学(3)—

中 里 浩 明

Summary

Jealousy/Envy and Social Comparison Processes

Hiroaki Nakazato

Salovey & Rodin (1989; Salovey, 1991b) distinguished "social-comparison jealousy" or envy from "social-relations jealousy" (in which is included "romantic jealousy") based on their research findings and some considerations. Referring to their remarks, and examining the very closeness in meanings of both terms, this article discussed, from our point of view, the relationships of social comparison and self-definition, the maintenance of self-esteem (self-evaluation) in having one's possessions, attributes, and attainments threatened, and furthermore the antecedents and social consequences of jealousy/envy.

1. 嫉妬と羨望の意味の遡及

嫉妬と羨望は、当然のごとく、人と人との狭間に生起する。そこでは、絶えず、財産、地位、人気、業績、愛などを対象として、熾烈な競争が蔓延し、先鋭化の度合いを強めている。人間の社会の中で生活を営んでいくからには、この種の社会的感情(瞋恚の感情)の噴出や奔流から、自らを完全に離脱し去ることは、殆ど不可能な企てであろう。

筆者(中里, 1991, 1992)は、既に、嫉妬と羨望の概念規定や意味構造に関しては、論攷と調査研究を実施し、或る程度は、考究の手を差し伸べてきたつもりである。従って、屋上に屋を架す所存は毛頭ないが、今後の展開のためにも、いま少し、補足しておいたほうが好都合な事項が残っている。

第一は、嫉妬(jealousy)と羨望(envy)の、語源や語根に関するものである(e. g., Salovey, 1991b; Salovey & Rodin, 1989)。周知の向きも少なくないと思われるが、"jealous"は、"zealous"や "zelos"(熱狂的な)というギリシャ語と、同じ語根に由来する。熱狂(zeal)が人物や対象に対する熱烈な献身や奨励であるとすれば、嫉妬は愛着し、心血を注いで把持してきたものが、喪失の危機にあるという信念なり疑惑を指す。他方、羨望は、"invidere"から派生し、このラテン語は、悪意を持って他者を眺めるの意である。従って、羨望とは、他者の財貨や属性に対する不満や欲望を表すのである(Bryson, 1977)。

元来は、このような区別が両者間にあり、しかるべき使い分けがなされてきた。年代物の辞書を正に手にすべきであるが、手許の、*Oxford Advanced Learner's Dictionary* (1989)を繙けば、嫉妬は、(a) 恋愛や愛情のライバルになりそうな人物に対して、惧れとか憤りを感じたり示したりすること、(b) 他者の優位や業績などに対して敵意を感じたり示したりすること(羨望に同義)、(c) 権利や所有物などについて心配で防衛的であること、である。

これに対して、羨望は、(a) 自分が望んでいる場合は猶更であるが、他者の幸運とか成功により引き起こされた不満、それを感じたり、示したり、表明したりすることであり、(b) 羨望を感じさせる対象、をも指す。

別言すれば、嫉妬は、自分が享受し、以降も保持し続けたいと望んでいる財貨(財産、地位、人気、業績、愛など)が、他者に転ずるかもしれないという、疑念や惧れに苛まれている状態の感情であり、他方、羨望は、そうした望ましい財貨に関しては、自分ではなく、他者が優位な立場にあることに対する不快や恨みがまじさを含意する。

ここまでの記述で明らかなごとく、嫉妬と羨望は、望ましい属性や関係の所有(享受)の焦点如何によって区別立てられてきたと見なせよう。諸々の財貨を、自分が所有しているのだが、他者から執拗に脅かされているときには、嫉妬が醸成され、対して、望ましい財貨が、他者に帰属しており、自分は到底及び得ないときには、羨望が結果するのである。

第二は、そう言うものの、両者の区別が、いつしか、混融し、模糊としてきたのも、証跡の示すところだということである。ただし、通常、嫉妬は、羨望よりも、一層不快なフィーリングだ、とは見なされている (*Longman Dictionary of Contemporary English*, 1987)。そこで、前々稿 (中里, 1991) でも、触れておいたが、「日常語では嫉妬と羨望の区別は曖昧…」 (高橋, 1985, 註 1), とされ、≪嫉妬≫が、しばしば、両方の状況や感情経験を記述するするために使用されてきている。日本語においては、特に、その彩りが濃厚である (註 2 参照)。

しからば、この辺りで、筆者が、最も簡潔で明瞭だと判断する、嫉妬と羨望の概念化を提示し、当該の論議に、一応の締めくくりをつけようと思う。しかも、その考察の視点を、P. Salovey と J. Rodin (Salovey, 1991b, Salovey & Rodin, 1984, 1985ab, 1986, 1988, 1989, 1991; Salovey & Rothman, 1991) に、充分すぎるほど、依拠していることを、この際、表示しておくのが、礼儀に叶っているであろう。

2. 嫉妬と羨望の状況的概念化

嫉妬と羨望に関する視点としては、素因や現象などによる概念化が可能であろうが、直後の議論のためにも、状況に基づく概念化を念頭に置いておくことが、利便となろう。この視点からは、これらの感情用語は、特定の感情のブレンドというよりは、個人がその中に自らを見いだす特定の状況や窮地に対するラベルと考えるのが、至当であると主張される (Hupka, 1981, 1984)。

さて、羨望と嫉妬の相違を、P-O-X トライアッドを用いて概念化しよう。ここで、P は、その感情状態を経験している個人であり、O は他者であり、X は第三者もしくは望ましい対象である (Salovey & Rodin, 1989)。

図 1. に掲げるとく、嫉妬と羨望、ついでに対抗 (rivalry) の定義の間を区別立てる決定的な要因は、トライアッドのうちの二要素間に感情を帯びた関係や単位形成の関係 (Heider, 1958) が、事前に確立されて存在するか否かである。Bryson (1977) は、嫉妬を、既に X との間に確立されていた P の独自の関係が、O と X との間に、現実には、または想像上、等価な関係が形成されようとの試みによって、脅威に曝されている、と P が信じる、その信念の帰結だ、と定義した。

この状況を指して、「社会的関係の嫉妬」 (social-relations jealousy) と呼ぶ。その原型的な形態、つまり、P と X との間の関係が、恋愛に纏わる場合を、「恋愛の嫉妬」 (romantic jealousy) と言う (Bers & Rodin, 1984; Salovey, 1991b; Salovey & Rodin, 1984, 1989)。

他方、人物 O が、X (第三者、対象、個人的属性、財貨など) との間に、既に、確立された関係を持っている場合、P が、X との関係において、O に取って替わり、O-X 関係を損傷しようとする、その試みは、羨望だと見なすことができる。ただし、こうした状況を記述するためにも、我々は、<嫉妬>という用語を、しばしば用いる。従って、これを指して、「社会的比較の嫉妬」 (social-comparison jealousy) と称することができる (e. g., Salovey & Rodin,

1989)。

これらに対して、対抗 (rivalry) は、ラテン語の rivalis に由来し、河川の水利権を求めての競争を意味する。ここでは、P も O も、X との間に、感情に基礎を置く関係を以前に持っていないが、両者ともに、そういった関係を望んでいる状況、として描くことができる (Bryson, 1977)。

ここに記した、社会的関係の嫉妬や社会的比較の嫉妬という表現法は、フィーリングそのものを明確にしようと試みるのに意を注ぐよりも、このようなフィーリングを引き出す状況に焦点を合わせるものであり、応分の便益が期待できる。

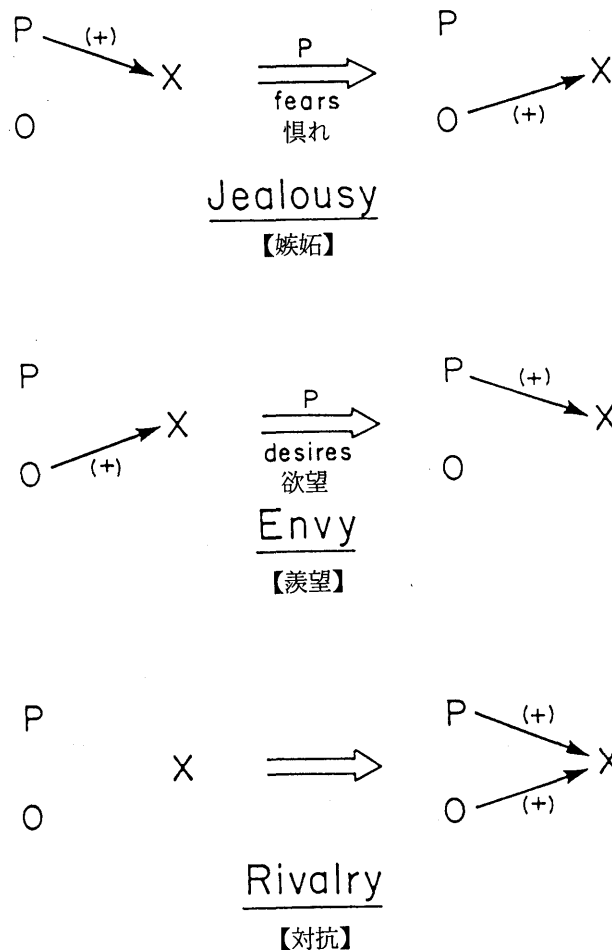


図1. 嫉妬, 羨望, 対抗の識別 (Bryson, 1977; Salovey & Rodin, 1989から引用)

3. 嫉妬と羨望の現象面での類似と相違

立論の流れを、一時堰き止め、寄り道をして、標題のごとき記述を、敢えてしようとする意図は、筆者の前々稿（中里，1991）が、W. G. Parrott（1991）の見解を主に置き、P. Salovey（1991b; Salovey & Rodin, 1989）の論旨を、副に置いている片寄りを是正せんがためにほかならない。後者を、もう少し詳しく記述するのが、適切であろうというものだ。また、前稿（中里，1992）の知見をも含めて考慮したい。

Salovey & Rodin（1986）は、被験者に、「嫉妬」という言葉の同意語をあげるように求めた。その結果、74種類もの、区別だった用語が記述されたが、これらは五群に分類された。即ち、(a) 羨望、貪欲、欲求、(b) 憎しみ、怒り、(c) 損傷、剝奪、悲哀、(d) 対抗、所有、(e) 不安、自尊心の低さ、自罰、である。

この同意語の範囲の広さは、人々が経験する嫉妬の多様さと並んで複雑さをも物語っている。嫉妬の主観的な経験というのは、多重の感情的な意味を持つ情緒的な（affective）経験であり、中心部を怒りと哀しみが占め、惧れないし心配が裏面に潜んでいる。

ところで、嫉妬を生じる条件が、価値ある社会的関係への脅威にあるとすれば、羨望を引き出す条件は、社会的比較の失敗にある。それにも拘らず、嫉妬と羨望を喚起する状況は、ともに、類似した情緒的反応（affective reactions）を生み出す。大抵は、怒り、哀しみ、心配、困惑、を含んでいる。

ただ違いと言えば、経験の差異は、質ではなく、感情の強さにあるようであった。嫉妬の場合のほうが、羨望に比して、より多くの悲哀や怒りを、心配や困惑のフィーリングを、報告していた。一層否定的な情緒（affect）が、表出されていたのである。

他に、様々な調査研究や考究が連脈をなしているが、これらの詳細は、ひとまず、横に置く（e.g., Salovey & Rodin, 1989）。ただ、二例を挙示すれば、Bryson（1976）は、嫉妬状況の感情と行動を、(a) 感情の荒廃、(b) 報復願望、(c) 生理的喚起、(d) 社会的支持の要求、(e) 個人的処罰、(f) 対決、(g) 怒り、(h) 印象管理、の八要因に纏めて記述した。続けて、嫉妬と羨望の感情を、単一種の感情的反応として特徴づけるのは、有効ではない、とも指摘している（Bryson, 1977）。

また、Spielman（1971）は、人は、羨望を経験するとき、自分の所有したいものを他者が持っていることで、不幸を感じたり、劣等感を覚える。けれども、嫉妬は、危惧、心配、疑惑、不信であり、価値ある財貨が愛情の喪失の可能性によって生じる、と既に述べていた。

さて、Smith, Kim, & Parrot（1988）は、Salovey & Rodin（1986）で使用された刺激材料としてのシナリオでは、フィーリングの強度を均一化することは困難であると批判し、被験者に、強い羨望や嫉妬を生じさせるような状況を頭に描くように求めた。その結果、フィーリングの明瞭な特徴が現出した。即ち、羨望は、劣等感、切望、欲望、自信喪失、不満、自意識、という特徴を持つことがよくあり、他方、嫉妬は、怒り、敵意、損傷、喪失の恐れ、疑惑、制御の喪失、拒絶、欺瞞、憤り、敵意、恨み、報復願望、を生み出していた。しかし、そ

れでも、嫉妬は、羨望よりも、甚だしく強い感情として一貫して経験される、と報告している。

さらに、Parrott & Smith (1990) は、被験者の、個々の項目評定値から全項目の平均値を減じることによって、要するに、別の方法で、強度反応を均一化した。こうすることにより、嫉妬と羨望は、主観的経験により、区別立てられることが可能になった。つまり、嫉妬は、孤独、裏切り、恐れ、不安、疑惑、というフィーリングによって特徴づけられ、他方、羨望は、恥辱、切望、罪悪感、克己、劣等感、によって彩られていた(中里, 1991参照)。

ここで、指摘されるべき点は、強度の差異を制御しない限り、嫉妬と羨望という、二つの感情状態の現象的区別は、これを、明瞭に見出すことが困難であった事実である。この操作の是非・重要度如何によって、立場は様変わりする。

筆者(中里, 1992) は、40種の感情の状態を動詞で掲げ、被験者に呈示し、嫉妬か羨望、どちらの特徴を、より強く、表しているか、また、どちらの感情のとき、より多く、経験される状態か、を評定してもらった。フォーマットは、「疑惑を抱く EE E J JJ」のごときものを使用し、嫉妬と羨望のいずれにも、その強度を含めて、反応できるように配慮した。しかも、一項目につき、ふたつまでチェックを認めたが、同種類のダブルチェックは、考慮の外に置かせた。得点づけは、EE と JJ が2点、E と J が1点とした。結果を纏めると、判断頻度は、嫉妬の項目が、数量でも順位でも、圧倒的に優勢であった。両属の項目も多々見られた。そこで、嫉妬と羨望を別々に順位づけると、嫉妬に関しては、憎しみ、怒りの項目群が顕著であり、羨望では、切望、劣等感、不満が上位を占めていた。

総括するに、嫉妬が突出の激しい、多くの情緒を擁し、両者に類縁は認定されるものの、幾分かの差異も見受けられた。なかなか、微妙なところである。

そういう次第で、事態は、必ずしも、簡明ではない。嫉妬を喚起する状況が、同時に、羨望をも生み出すということは、實際上、十分に想定可能なのである。例えば、パートナーとの関係が、ライバルによって脅かされる場合、関係の喪失に思いを馳せれば、恋愛の嫉妬を経験するであろうし、また、愛するパートナーを戸惑いさせるような、ライバルの秀逸な属性に着眼するとすれば、羨望を味わうことであろう(e. g., Salovey & Rodin, 1986)。

かように、両者は交絡している。筆者が、「一応の、基本的な区別立ての後には、嫉妬羨望もしくは羨望嫉妬として、引っくり回してしまうのも、事態に即し、生産的であるかもしれない」(中里, 1991, p. 63), と示唆した点も、この事情を云々してのことに、ほかならない。

改めて述べ直せば、嫉妬が全体であり、羨望は一部であろう。言うなれば、羨望には、否定的な社会的比較を通しての、自己評価への脅威が存在する。そして、まさに、その同じ脅威が、嫉妬では、他者との挑戦的な関係という脈絡で生起するのである(Salovey, 1991b, p. 268)。

4. 社会的比較と自己定義

社会的比較過程の理論は、自己知識(Festinger, 1954)や自己高揚(Latané, 1966; Wills, 1981)の源泉として、我々が、比較情報を慎重に探究する様相を、説明しようとしてきた(Masters & Smith, 1987; Suls & Miller, 1977, Suls & Wills, 1991)。本稿との

関連では、評価を脅かす帰結をもたらす否定的な比較が、それも、セルフイメージに抵触するような脅威をはらむ比較が、問題とされよう。

Salovey & Rodin (1984) は、社会的比較が嫉妬や羨望を最も喚起しそうな状況は、個人が、自分と類似した他者との絡みで、これと較べられて、評価を脅かされそうなフィードバックを受け取り、しかも、そのフィードバックが特に自己関連的であるか、自己定義の次元に係わっている場合である、と指摘した。

この比較状況が、安定した関係への脅威を含むとき、嫉妬が喚起される。そうでないとき、かかる状況の帰結は、羨望である。これらには、三種の誘発条件が数えられ、逐次、検討することにしよう (Salovey, 1991b)。

①否定的フィードバック：我々は、些末な事柄に煩わされはするものの、嫉妬や羨望を唯一経験するのは、他者の特徴や行動によって、自分の価値(our senses of self-worth)が脅かされる場合である。しかも、包括的な自尊心ではなく、現時の自尊心・自己評価(self-esteem, self-evaluation)が、社会的比較によって、脅威に曝される場合に、嫉妬や羨望は結果しそうである。しかも、とりわけ深甚だと思われるのは、比較する他者の所為による、地位の喪失から生じる自己評価への脅威である。

Sabini & Silver (1982) は、この間の事情を剔抉している。「羨望が生じやすいのは、社会的位置が触れられるのを経験する場合である。」(p. 25)。この際、羨望と結びついた行動、例えば、ライバルを扱き下ろすという行動をとることは、自己縮小(self-diminition)の防止の動機として想定可能である。しかし、この時に、そんな羨望的な反応をとるならば、事態を一層悪化させるばかりであろう。

いずれにしても、強調されるべき点は、羨望を生じさせる属性の差異は、自己評価に最も影響を及ぼすような差異だということである。なぜなら、それは、その個人にとって、重要な、自己関連的なものだからである。

②フィードバック領域の自己関連性：個人は、自分の自己定義(self-definition)と関連する諸次元上で、他の人々と比較することを選好するものである(Miller, 1984)。そこには、自分の自己証明(identity)に中心的な諸次元で、自らを評価したいという動機が反映されている、と解釈できる(Wood, 1989)。

ところで、社会的比較と自己定義の関係について、体系的な考察を加えたのが、Tesser (1986, 1988, 1991; Tesser & Campbell, 1983) であることは、衆目の一致して認めるところであろう。彼のモデルの根幹は、大部分の人々の第一義的な動機は、肯定的な自己評価(positive self-evaluation)にある、ということだ。その肯定的な自己評価は、二つの、時として競合する過程、反映(reflection)と、比較(comparison)を通して獲得される。

(a) 反映が生じるのは、親密な他者の成功により、自分も高ぶった気持ちになる場合である。我々は、親友が結婚するとか、母校のフットボールチームが全国制覇を成し遂げたりなどすると、まるで、わがことのように、嬉しく感じ、誇らしく覚える。Tesser (1986) によれば、我々が他者と感情的に親密で(友人、親類、重要な他者)、加えて、その他者の遂行(業績)

が高品質のものである場合に、反映の過程が開始し始めるのである。

(b)ところが、幾つかの条件の下では、親密な他者が質の高い業績をあげると、個人の自己評価は脅威に曝されかねない。時には、他者の成功は、自分の失敗や怠慢のように感じられることさえある。このような状況を、比較過程を喚起する状況、と呼ぶ。

それでは、反映か比較か、即ち、なにが、親密な他者の成功が我々をも高揚した気分させるか、それとも、逆の効果をもたらすか、その臨界的な変数、が問われなければならない。それは、即ち、他者の成功や個人的資質が、我々の自己定義に持つ関連性 (relevance) である。

反映が生じるのは、他者の遂行 (業績) が、我々の自己定義に抵触しない領域に関する場合である。自己定義が脅かされない限りにおいて、友人の成功の反映された光栄に、我々は浴することができる。先程の例に加えて、親友の某が、スカッシュの腕が上達していくのを感じたとき、自分は頭打ちなのにも拘らず、嬉しく思うことがある。

だがしかし、個人的な関連性が鋭く高まってくると、我々は、様々な方策を駆使して、自らの肯定的な自己評価を維持・強化しようとするであろう。(e. g., Tesser & Campbell, 1983)。

例えば、友人の某が、『心理測定』の本を書き、献呈されたような場合である。どうするか。(i) 我々の自己定義を変更し、他者の遂行 (業績) の関連性を減じる (自分は、心理測定の本を出版するほど、その領域に入れあげてはいない)。(ii) 当の他者との関係の親密さを減じる (某は、友人なんかではなく、スカッシュの相手を探していたときに、偶々、拾い上げたのに過ぎない)。(iii) 他者の遂行 (業績) の質を再吟味し、偶然の賜物視するか、事実において妨害する (一読者を装い、編集者に、さも真摯ぶった手紙を書き、内容の不備をあげつらう)。

かくのごとく、いかにも、かくのごとしである。他者の卓越した業績を、我々は、それとして、賞賛するのに、やぶさかではない。ただ、その優れた業績が、どこか埒外で達成されると、申し分がないだけなのである。

だが、自己定義に深く係わる領域で、抜群の業績をあげた他者を、本心から、賞美するほど、我々の大部分は、寛容であり得ないのではないか。自らの自己評価が脅威に曝されているわけだから、羨望、即ち、社会的比較の嫉妬の苦汁を嘗めることにならざるを得ない。

さらに、この事柄は、それだけに留まらず、一般化されていく。我々は、自己定義や自己評価を維持するのに重要な、自己の諸々の局面の全体 (属性、財貨、親密な関係など) を、押しなべて、嫉妬深く防衛しようとしにかかるのである。

立場を変え、観察者の立場にたてば、他者が、自己価値を維持しようとして、或いは、権力者の意を迎えようとして、第三者の品位を不当にも中傷し、毀損するのを目撃すると、羨望または嫉妬の故であると、我々は賢明にも察知することができる (Salovey & Rodin, 1989; Silver & Sabini, 1978ab)。

③比較の他者との類似性: 社会的比較過程の理論にとって、Festinger (1954) 以来、類似性という変数は、関心の的であった。比較が最も盛んに起こりそうなのは、能力とか態度という事項で、他者が自分と類似している場合だというのが、そもそもの出発点である (e. g., Sal-

ovey, 1991b; Suls, 1977)。

当然ながら、比較領域に関する類似特徴を持つ他者からのフィードバックに、個人は最も敏感である (e. g., Goathals & Darley, 1977)。また、二人の個人が、能力において接近しており、しかも、他者が課題で成功を収めたことを知らされ、自分を省みざるを得ない事態に追い込まれた場合には、比較競争は熾烈を極め、羨望が増大するようであった (Dakin & Arrowood, 1981)。

この時点で、羨望と貪欲 (coveting) との区別をしておくのも、都合がよいかもしれない。貪欲とは、類似の他者が所有しているものを、自分も無性に所有したいという強い欲望を言う。これに対して、羨望には、他者が意のままにしているものに対する激しい憤慨が含まれ、同時に、他者がそれを剥奪されるのを見たいという欲望と結びついている (Salovey, 1991b, p. 272)。このように、羨望は、他者を絡めての剥奪感に根ざしている。

Festinger (1954) によれば、個人は、自分の能力を正確に評価するだけでなく、他者と関係づけて、自らを高めたいと努めている。これを指して、上向きの単一方向的な動因と呼んでいるが、羨望は、自己上昇を求める動因以上のものである。羨望者は、自分に多くのものを望み、他者には少なからんことを期待する。いや、それどころか、他者から、望ましい属性が除去される光景を、心の中で乞い願うようである。必ずしも、その属性が、自分に転移することは要しない。このように、羨望とは、自分を他者と忌々しげに比較する衝動から発する (Schoeck, 1969/1987)。それが事実ならば、羨望を経験する個人は、正確な自己評価を合理的に探究する者とは限らない、ということになる (Wood, 1989)。

5. 嫉妬・羨望と自己評価の維持

繰り返しになるが、Salovey (1991b) によれば、自己評価全般への脅威が、人を、嫉妬や羨望へと駆り立てるわけではない。むしろ、嫉妬や羨望が、親密な関係の中に現出するのは、当の個人の、特に自己 (self) を定義する領域において、自己価値が他者から脅かされるときである。換言すれば、嫉妬や羨望が生じるのは、他者の遂行 (業績) や属性が、社会的比較の意味においても、また、重要な社会的関係や恋愛の関係の脅威においても、正に、「我々の生存している場所で、我々を撃つ」ときなのである (p. 228)。

ところで、嫉妬や羨望の経験に関して、比較フィードバックの自己に対する関連性が重要だ、と明示的に指摘されたのは、*Psychology Today* 誌で、約25,000名の、多岐に亘る読者を対象に実施された調査においてであった、と言えよう (Salovey & Rodin, 1985ab)。

詳細に及ぶことは避ける。仮説は、嫉妬や羨望は、個人の自己定義にとって、特に顕在的な (salient) 状況の下で報告されるであろう。ことに、その領域で、自己観や自己像の理想と現実の間に、甚だしい齟齬が存在するとき、嫉妬や羨望が生起するはずである。その結果、自尊心・自己評価の低下は免れない。そうした場合、復元を期する行動がとられるが、端から、それと、識別可能な場合も少なくない。こういうものであった。

調査対象者は、二頁の質問紙に、標準的な自尊心尺度、嫉妬や羨望に関する、様々な行動へ

の関与の頻度や蓋然性などの記入を求められた。その結果、嫉妬や羨望の感情は、非常に価値ある、自己定義的な属性に関する、現実と理想の間の評定の落差、この指標によって、最も適切に予測された。この落差の大きさは、低い自尊心・自己評価と関連を持っていたし、また、これらは、いずれも、嫉妬と羨望の経験と結びついていた。しかも、その結びつきは、自己定義的（防衛的）な領域において、極度に強かった。或る領域での、嫉妬や羨望の、単一にして、最大の予測因は、自己にとっての当該領域の重要性であった、と言える。さらに、こうしたパターンが、最も効果的だったのは、身体的魅力の領域においてであったのである（Salovey & Rodin, 1989, p. 229）。

この研究に先立って、Salovey & Rodin (1984) は、羨望、即ち、社会的比較の嫉妬について探究していた。それは、次の三つの喚起条件の下で報告される。(a) 他者と較べて、否定的な誘発性 (valence) を持つ自己情報、(b) この情報の持つ自己関連性の高さ、(c) 比較人物との類似性の高さ、または、親密な個人的関連の存在、である。

こうした条件が揃うと、個人は、肯定的な自己評価に、転瞬、脅威を経験し、脅かされた自己価値を補強しようとして、その後の、一連の行動に携わるはずである (e. g., Salovey, 1991, p. 273)。

Salovey & Rodin (1984) の実験では、目的は、性格と職業選択に関するものと称され、被験者は、自ら表明した職歴関与に基づいて調達された。性格目録に記入したのち、被験者は、関連する領域または別個の領域で成功しそうだという、偽りのフィードバックを受け取った。そして、後刻、職歴への関心が自分と類似または相違した、成功者と会う手順になっている、と思い込んでいた。次いで、被験者は、当の人物が書いたとされるエッセイを読んで、特徴の判断を、別の性格検査上に下すように求められた。

実験の手続きの概略は、以上のごとくであるが、被験者が最大の羨望のフィーリングを報告したのは、自分は、否定的な自己関連フィードバックを受け取り、しかも、後で、類似の成功者と会わなければならない、と思い込んでいた場合である。比較（類似）の他者との対面は、意志消沈と心配のフィーリングでもって迎えられた。しかも、この状況は、行動面に深甚な影響を及ぼしていた。即ち、他者との交友願望は低下し、エッセイ読了後の人物評価においても、実に、様々に貶価している。結果としてとられた、これらの行動は、比較人物の相対的な地位を押し下げ、当該人物を、比較フィードバックの源泉と眺める可能性を減殺するのに役立った、と見なせよう。

羨望と毀損に関する、この結果は、Silver & Sabini (1978a) の報告と、整合性を有する。彼らは、医学校に応募した四名の人物の成功と失敗のシナリオを撮影したビデオテープを、被験者に呈示した。シナリオには、幾つかのバージョンがあったけれども、登場人物の一人が目標に到達（成功）し、他は失敗するように構成されていた。被験者は、テープを観たのち、登場人物たちが、お互いにどのように感じているかを、質問紙に記入するように求められた。

全条件を通じて、大部分の被験者は、失敗者は、成功者に対して、羨望や嫉妬を覚えているだろう、と感じていた。例えば、シナリオの標準版では、被験者の92%が、失敗した者は、

羨望や嫉妬を経験しているだろう、と述べていた。

纏めれば、羨望の脈絡的な成分には、或る個人の財産、属性、業績が、他者の地位を減ずる、という状況が含まれている。この状況で、地位の減少した人物が、成功者の性格を矮小化して表現しようとするか、その成功を削り落とそうと努めるならば、そこに、羨望が知覚されるのである (Silver & Sabini, 1978b)。

いずれも、傷つき損なわれた自己評価を、回復しようとの試みや営み、と受け止めることができよう。これらの発見結果は、肯定的な自己評価の維持が大抵の個人の主要な動機をなしている事情を証拠立てている、と見なすことができる (e. g., Tesser, 1986)。

6. 嫉妬と羨望の社会的帰結

嫉妬や羨望を抱かざるを得ないような状況に直面したとき、我々は、どのような行動をとるであろうか。時には、亀裂の入った自己評価を上塗りしたり、生起しそうな社会的比較の場面から遁走したり、ライバルの業績を点検し直したりなど、種々様々な方策を労して、自己の存在証明 (identity) を、再確認しようとはかることであろう。以下に、列挙していく (Salovey, 1991b)。

①自己定義の変更：比較から生じる嫉妬や羨望を、個人が、最小限に抑え得る一つの手立ては、比較領域の自己関連性の程度を減じることだ。暗黙のうちにであっても、明示的であっても、それは、構わない。こうして、くだんの属性なり関係の領域が、もはや重要視されなくなれば、社会的比較のフィードバックが、嫉妬や羨望をもたらすことは、ありそうでなくなる。

嫉妬や羨望の対処方略に、選択的無視 (selective ignoring) と呼称される因子があり、その中には、比較領域の重要性を減じる、という項目も含まれていた。この対処方略は、嫉妬や羨望が喚起されそうな状況に直面したさい、その経験を防止するのに、相当の効果が認められた。即ち、比較に伴伴する苦痛を減殺するためには、他の方略（自己を肯定的に眺めること、つまり、自己補強）よりも、明らかに効果的であったのである (Salovey & Rodin, 1988)。

嫉妬や羨望を駆り立てる状況は、人に、不安や不満を感じさせるような、自己帰属を生起することは明白であるから、自己に焦点を合わせた、感情中心の対処方略 (emotion-focused coping) よりも、刺激に焦点を合わせた、問題中心の対処方略 (problem-focused coping) のほうが、とりわけ、有効性が認められるようだ (cf., Lazarus & Folkman, 1984)。ただし、嫉妬と羨望に関して、この分野の調査研究は相対的に少なく、検討の余地が多分に残されている。

また、或る領域では、自他ともに成功を収め、対等の業績をあげたのであるが、他者のほうが、少し優れている領域（例：社会的感受性、審美眼）が、別にあり、その領域の重要性を、被験者に求めたところ、それは、自分にとって、余り重要でない領域だと判断していた。逆もまた、真なりである (e. g., Tesser, 1991)。

いま一つ、社会的比較に関連して、興味深いのが、下向きの比較 (downward comparison) という思念である。羨望を生む比較によって誘発された自己定義の浮動は、また、上向きの比

較から、下向きの比較への移行を、促進するであろう。即ち、到底、相手に及び得ない場合、羨望を抱く個人は、自分を、劣等な、不利な状態にある他者と比較することが、得策であり、自らの自己定義には一層関連がある、と決定するかもしれない。下を見て、胸をなでおろす。そうすれば、少なくとも、主観的幸福感 (subjective well-being) には浸れるであろう (Wills, 1981)。この分野も、探索に値する。

②比較人物との関係性の減少：羨望を喚起するような経験を終結しようとして、個人は、ライバルとの接触の量や可能性を最小に抑えることがある。しかし、それよりも、もっと良い方法は、自分はライバルに心底好意が持てないと見なすか、或いは、ライバルは、自分と全く類似していないと決め込み、社会的比較の関係対象から、彼らを除去してしまうことである (Brickman & Bulman, 1977)。

③ライバルの扱き下ろし：社会的比較の結果、脅威を蒙るような、否定的な結末を見た場合、我々は、往々にして、成功したライバルを扱き下ろしにかかる。しかも、比較の次元が自己に関連を持つ場合には、比較する他者の資質なり特徴を、殊更、過少評価しがちである。例えば、否定的で、自己関連的なフィードバックを受け取った被験者は、類似しているが、成功を収めたライバルを、より否定的に評価する傾向が見られた (Salovey & Rodin, 1984)。

このように、自己評価が脅かされたとき、ライバルの扱き下ろしが開始される。これが、羨望の定義的な特徴である (Silver & Sabini, 1978a)。我々は、成功した他者の業績や属性を削り取ることによって、自らの自己縮小を回避しようと試みる (Sabini & Silver, 1982)。また、他者の優越した立場を汚す目的で、とりわけ、否定的な属性に焦点を結ぶこともあろう。身に正義を掲げつつ、他者の足を引っ張ろうとしたりする。いずれにしろ、羨望は、自己防衛的な (self-protective) 機能を果たすのである。

④他者の成功要因の再帰属：或る人物の業績や属性や関係が落剥していくのを、他者が、手を拱いて、眺めるに終始するような場合、時に、嫉妬や羨望の故だと見られることがある。他者の成功は、技量の故よりは幸運に帰したい思いがするし、不公平な便益に与かったからだ、と決めつけたりしたいものである。さらには、個人は、自己評価に脅威を与えるかもしれない他者の業績に、積極的に干渉し、妨害することまで、しかねないものなのである。

⑤他者への暴力の行使：嫉妬や羨望が、暴力の行使に終結する事例は、紙上を賑わせ、世間に充ち満ちている。大抵は、痴情の嫉妬であり、事由には、妄想を伴うこともあれば、そうでない場合もある。同様に、羨望も暴力につながり得るが、それは、自分の業績や属性の欠陥を、恣意的な、差別的な力の故だと誤認し、激怒する場合であろう。

7. 結語

嫉妬や羨望は、ごく普通に、あまねく、経験される感情状態である。この社会的感情を理解しようとして、筆者は、Salovey (1991a) 編纂の『嫉妬と羨望の心理学』という、極めて刺激的で、情報価値に甚だしく富んでいる、書物に鼓舞され、啓発されて、前方に歩かされている恰好である。

今回は、こういった感情を経験するさいに、多大の影響を持つ社会的比較過程の役割に焦点を合わせた。羨望や嫉妬は、しばしば、自己定義に係わる（つまり、関連の深い）領域において、正に、その自己評価に脅威を与えるようなフィードバックに対する、あれかこれかの比較の結果である（Salovey, 1991b, p. 280）。なによりも、羨望や嫉妬は、反社会的な帰結をもたらすため、個人は、脅かされた自己評価を補強しようと努めにかかわるわけなのである。

逆の面から見れば、嫉妬や羨望は、自己定義に緊密な結びつきを持ち、自分にとって、真に重要な関係や達成を確認させてくれるが故に、有用な状態と言えなくもない（Salovey & Rodin, 1989, p. 242）。感情の強さと自己（self）との間には、一見して、緊密な結びつきがある。だから、自己は、情緒的（affective）経験と動機づけられた社会的行動との間の、連繋（link）であるのかもしれないのである（Salovey & Rodin, 1985c）。

遙か彼方を仰ぎ見れば、乗り越えるべき課題の連峰が、峨々たる形相を覗かせている思いがよぎるが、まずは、目の前の山塊（嫉妬・羨望の自己評価維持モデルの検討）が、筆者を待ち構えている。

註

1. 『社会学事典』（弘文堂）によれば、自分が欲する客体をだれか他の人間が自分より多く所有しているとき、ひとは嫉妬ないし羨望とよばれる感情を経験する。地位、名誉、能力、生活チャンス、愛などさまざまな客体をめぐって、この感情は生じうる。日常語では嫉妬と羨望の区別は曖昧…。主体の欲する客体が愛である場合を嫉妬（jealousy）、それ以外のものである場合を羨望と呼ぶのが便利である。後者はさらに、敵意という成分が含まれているか否かで、単純なタイプと複雑なタイプの羨望に、二分されるだろう。英語のenvy…は、多くの場合、この複雑なタイプの羨望である。日本語ではこの種の羨望と上に定義した嫉妬が、しばしば「嫉妬」という同一の感情語で指示される（高橋, 1985）。
2. 『広辞苑』（第4版、岩波書店）によれば、羨望とは、羨ましく思うこと、とのみ記されている。これに対して、嫉妬や妬むのほうは多彩で、これを纏めれば、①他人の優れた点に引け目を感じたり、人に先を越されたりして、羨み、憎み、そねむこと。②自分の愛するものの愛情が、他に向くのを、恨み、憎むこと。また、その感情。りんき。やきもち。③癪だと感ずる。悔しいと思う。ここで、反芻するに、羨望の定義に、『言泉』や『大辞林』に認められた敵意や攻撃性が欠落しているのが、特徴的である（中里, 1991, 註1参照）。

引用文献

- Bers, S., Rodin, J. (1984). Social-comparison jealousy: A developmental and motivational study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 766-799.
- Brickman, P., & Bulman, R. J. (1977). Pleasure and pain in social comparison. In J. Suls, & R. L. Miller (Eds.), *Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives* (pp. 149-186). Washington, DC: Hemisphere.
- Bryson, J. B. (1976, 9). The nature of sexual jealousy: An exploratory study. Paper presented at the annual meeting of the American Psychological Association, Washington, DC. Cited in Salovey, P. & Rodin, J. (1989). Envy and jealousy in close relationships. In C. Hendrick (Ed.), *Review of personality and social psychology: Vol. 10. Close relationships* (pp. 221-246). Newbury Park: CA, Sage.

- Bryson, J. B. (1977, 9). Situational determinants of the expression of jealousy. Paper presented at the annual meeting of the American Psychological Association, San Francisco, CA. Cited in P. Salovey & J. Rodin(1989). Envy and jealousy in close relationships. In C. Hendrick(Ed.), *Review of personality and social psychology: Vol. 10. Close relationships*(pp. 221–246). Newbury Park: CA, Sage.
- Dakin, S., & Arrowood, A. D. (1981). The social comparison of ability. *Human Relations*, 34, 89–109.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human relations*, 7, 117–140.
- Goethals, G. R. & Darley, J. M. (1977). Social comparison theory: An attributional approach. In J. Suls, & R. L. Miller(Eds.), (1977). *Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives*(pp. 259–278). Washington, DC: Hemisphere.
- Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations*, New York: Wiley. (ハイダー, 大橋正夫訳, (1978). 対人関係の心理学 誠信書房)
- Hupka, R. B. (1981). Cultural determinants of jealousy. *Alternative Lifestyle*, 4, 310–356.
- Hupka, R. B. (1984). Jealousy: Compound emotion or label for a particular situation? *Motivation and Emotion*, 8, 141–155.
- Latané, B. (1966). Studies in social comparison: Introduction and overview. *Journal of Experimental Social Psychology*, Supplement 1, 1–5.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). Stress, appraisal, and coping. New York: Springer. (ラザルス・フォルクマン, 本明寛・春木豊・織田正美監訳, ストレスの心理学: 認知的評価と対処の研究(1991). 実務教育出版)
- Masters, J., & Smith, W. P. (Eds.), (1987). *Social comparison, social justice, and relative deprivation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Miller, C. T. (1984). Self-schemas, gender, and social comparison: A clarification of the related attributes hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 1222–1228.
- 中里 浩明(1991). 嫉妬と羨望: W. G. Parrottの類型学をめぐって—嫉妬と羨望の心理学(1)— 神戸女学院大学論集 38–2, pp. 51–66.
- 中里 浩明(1992). 嫉妬と羨望の意味構造—嫉妬と羨望の心理学(2)— 神戸女学院大学論集 38–3, pp. 129–134.
- Parrott, W. G. (1991). The emotional experiences of envy and jealousy. In P. Salovey(Ed.), *The psychology of jealousy and envy*(pp. 3–30). New York: Guilford Press.
- Parrott, W. G., & Smith, R. H. (1990). Distinguishing the experiences of envy and jealousy. Manuscript submitted for publication. Cited in W. G. Parrott(1991). The emotional experiences of envy and jealousy. In P. Salovey(Ed.), *The psychology of jealousy and envy* (pp. 3–30). New York: Guilford Press.
- Sabini, J., & Silver, M. (1982). *Moralities of everyday life*. Oxford: Oxford University Press.
- Salovey, P. (Ed.)(1991a). *The psychology of jealousy and envy*. New York: Guilford Press.
- Salovey, P. (1991b). Social comparison processes in envy and jealousy. In J. Suls & T. Wills (Eds.), *Social comparison: Contemporary theory and research* (pp. 261–285). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Salovey, P. & Rodin, J. (1984). Some antecedents and consequences of social-comparison jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 780–792.
- Salovey, P. & Rodin, J. (1985a, 2). Jealousy and envy: The dark side of emotion, *Psychology Today*, 32–34.
- Salovey, P. & Rodin, J. (1985b, 9). The heart of jealousy. *Psychology Today*, 19, 22–29.
- Salovey, P. & Rodin, J. (1985c). Cognitions about the self: Connecting feeling states and social

- behavior. In P. Shaver(Ed.), *Review of Personality and Social psychology*(Vol. 6, pp143-166). Beverly Hills, CA: Sage.
- Salovey, P. & Rodin, J. (1986). The differentiation of social-comparison jealousy and romantic jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 1100-1112.
- Salovey, P. & Rodin, J. (1988). Coping with envy and jealousy. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 7, 15-33.
- Salovey, P. & Rodin, J. (1989). Envy and jealousy in close relationships. In C. Hendrick(Ed.), *Review of personality and social psychology: Vol. 10. Close relationships*(pp. 221-246). Newbury Park: CA, Sage.
- Salovey, P. & Rodin, J. (1991). Provoking jealousy and envy: Domain relevance and self-esteem threat. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 4, 395-413.
- Salovey, P. & Rothman, A. (1991). Envy and jealousy: Self and society. In Salovey, P. (Ed.), *The psychology of jealousy and envy*(pp. 271-286). New York: Guilford Press.
- Schoeck, H. (1969/1987). *Envy: A theory of social behaviour*. Indianapolis, IL: Liberty Press.
- Silver, M., & Sabini, J. (1978a). The perception of envy. *Social Psychology*, 41, 105-117.
- Silver, M., & Sabini, J. (1978b). The social construction of envy. *Journal for the Theory of Social Behavior*, 8, 313-332.
- Smith, R. H., & Parrott, W. G. (1988). Envy and jealousy: Semantic problems and experimental distinctions, *Personality and Social Psychology Bulletin*, 14, 401-409.
- Spielman, P. M. (1971). Envy and jealousy: An attempt at clarification. *Psychoanalytic Quarterly*, 40, 59-82.
- Suls, J. (1977). Social comparison theory and research: An overview from 1954. In J. Suls, & R. L. Miller(Eds.), (1977). *Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives*(pp. 1-19). Washington, DC: Hemisphere.
- Suls, J., & Miller, R. L. (Eds.), (1977). *Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives*. Washington, DC: Hemisphere.
- Suls, J., & Wills, T. A. (Eds.), (1991). *Social comparison: Contemporary theory and research*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 高橋 由典(1985). 嫉妬 見田宗介・栗原彬・田中義久(編)『社会学事典』(p. 373), 弘文堂。
- Tesser, A. (1986). Some effects of self-evaluation maintenance on cognition and action. In R. M. Sorrentino & E. T. Higgins(Eds.), *Handbook of motivation and cognition: Foundations of social behavior*(Vol. 1, pp435-464). New York: Guilford Press.
- Tesser, A. (1988). Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L. Berkowitz(Ed.), *Advances in experimental social psychology*(Vol. 21, pp. 181-227). New York: Academic Press.
- Tesser, A. (1991). Emotion in social comparison and reflection processes. In J. Suls & T. Wills (Eds.), *Social comparison: Contemporary theory and research*(pp. 115-145). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Tesser, A., & Cambell, J. (1983). Self-definition and self-evaluation maintenance. In J. Suls & A. Greenwald(Eds.), *Psychological perspectives on the self*(Vol. 2, pp. 1-31). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Wills, T. A. (1981). Downward comparison principles in social psychology. *Psychological Bulletin*, 90, 245-271.
- Wood, J. V. (1989). Theory and research concerning social comparison of personal attributer. *Psychological Bulletin*, 106, 231-248.

(原稿受理 1992年3月11日)